

田島 正三（たじま・しょうぞう）

1、プロフィール

歌人。口語短歌を中心に、詩・小説・エッセイ、新短歌に関する評論などを発表、三戸短歌会を結成した。

<生没>

1907(明治 40)年7月 23 日 ~ 1970(昭和 45)年8月 12 日

<代表作>

『田島正三遺稿集』

<青森との関わり>

三戸町の生まれ。青森商業学校卒業。青森県産業(農・商)界の要職につきながら文学活動を続けた。

2、作家解説

明治 40 年7月 23 日、三戸郡三戸町に生まれる。父田島三太郎は糸商・青果物商を営み、県会議員などを勤めた地方の名士である。

大正9年三戸尋常高等小学校卒業後、県立青森商業学校に入学。新卒の教員として赴任していた横山武夫と出会う。庭球部の主将で成績優秀な正三は、福島高等商業学校に進学する。しかし肺結核にかかり、入院加療を続けたものの思わしくなく、中途退学せざるを得なくなる。この時の闘病生活、挫折が文学にめざめる大きな契機となった。また、叔父である俳人北村烏城や母正子の影響も少なからずあった。田島正像の名でガリ版誌「エンジュ」に短歌、俳句を発表し始めたのは 21 歳の時である。

昭和3年9月、千葉県に転地療養する。アナーキズム短歌を宣言していた西村陽吉主宰の第二次「芸術と自由」に参加、口語短歌を発表していく。また詩や小説の創作も始め、昭和5年1月には竹内俊吉選「サンデー東奥」懸賞小説に「犬殺し」が入選している。

4月に帰省した正三は家業を手伝いながら、「創生時代」「座標」「短歌創造」など数種の同人誌に参加、口語短歌、エッセイ、評論などを意欲的に発表していった。「定量性論考ーアナルキズム短歌方法論の一節」を昭和7年2月「サンデー東奥」に発表。権力否定をテーマとして、ユーモア、批評精神、人間味豊かな作品を率直にのびやかに創作していった。昭和9年1月、「三戸短歌会」を結成する。

昭和13年31歳で青森県蚕糸商組合理事長に就任したのをはじめとして、三戸中央青果KK社長、三戸町議会副議長など数々の要職につき、地域社会、産業発展に貢献を続けた。

昭和41年小説「ヘンタ町葬記」で文学活動を再開。還暦を迎えた昭和42年、第三次「芸術と自由」同人となり地域文化振興と新短歌創作に意欲的に取り組んでいく。しかし3年後の昭和45年8月12日、63歳で没する。最後の作品は短歌10首「山びこに憶う」（「芸術と自由」38 昭和45年7月）であった。

3、資料紹介

○『田島正三遺稿集』

図書

1971(昭和46)年8月12日

190mm×138mm

短歌を主に各時代の代表作を収録している。「芸術と自由Ⅰ」(昭和3～5)140首、「創生時代」(昭和5～9)88首、「芸術と自由Ⅱ」(昭和41～45)143首。小説1、詩・エッセイ5篇。竹内俊吉らによる追憶文5篇、年譜。編集川崎むつを、発行田島南江子。167頁。